

コロナ禍のロシアを見つめながら

Observing Russia in the Time of Coronavirus

ロシアは中国で新型コロナウイルスが猛威をふるい始めるとすぐに国境を閉鎖し、3月半ばまでは感染を抑えていた。しかしその後、ヨーロッパからの帰国者により爆発的な拡大を見せ、5月3日には一日の感染者数が1万人を超えた。厳しい外出禁止措置などを行った結果、ようやく半減したとはいえ、感染者数は世界4位を占め、2020年9月現在、再び増加の兆しを見せている。

ロシア国内の生活は、とりわけ3月28日以降の一斉休業、外出禁止（デジタル許可証をダウンロードして買い出しなど必要最低限の外出のみ可）となった際には、良くも悪くも、各国と共通する長所や問題点、そしていかにも「ロシアらしい」面も発揮されたように思う。

プーチン大統領による、ほぼ強制的な外出禁止令と、その後の（今も続く）外でのマスク着用はある程度守られている。政府は休業補償や病院建設を即決し（批判もあったが）、ヨーロッパのように「マスクをしない自由」といった主張が見られないあたりは、ソ連時代から続く権力への「従順さ」を感じた。それでも初期の頃には、隔離された病院から脱走する人たちが相次ぎ、いったいなぜ逃げるのかと不思議に思ったが、もしかしたら、当局に「幽閉」されるということそのものが呼び起こす恐怖があるのではないかと考えたりもした。

そんな中、かなりの人たちは都市部を離れていった。ロシアには「ダーチャ」と呼ばれる別荘をもっている家庭が多い。別荘といっても贅沢なものではなく、食糧不足が慢性化していたソ連時代に郊外の土地を政府が与え、そこに小さな家を建て（ほとんど自分の手で建てる）、畑を作り冬に備えて野菜を栽培するためのものだ。今回のコロナ禍では、このダーチャが活躍した。都市部

の厳しい外出禁止令と人混みを避けて、多くの人がダーチャに避難した。今は地方でもWi-Fi環境が整備されていて、ダーチャに籠ってもテレワークが可能だ。知人のアナトーリーさんは高血圧など持病があるため、半年以上をダーチャで過ごし、畑に出る以外は家にこもり、オンライン授業で教師の仕事をこなしている。この冬は町には戻らずにずっとダーチャで過ごすつもりだと言う。

ソ連崩壊を経験している彼は、どこにも食べ物が売っていなかったソ連崩壊時とその後の混乱期に比べたら、今はスーパーに物は溢れているし大きな不安はないと言う。ただ、経済の停滞で給与が支払われず貯金が尽きたという人も多く、物は売っているのにお金がなくて買えないという事態は未経験だとも嘆く。ない物が買えないのは納得できるが、物があるのに買えずに飢える資本主義というシステムはおかしくはないかと問うてきた。

一方で、在宅生活が家庭内暴力のリスクを高めたのも事実だ。これはどの国でも共通の問題だが、ロシアでは2017年に法改正がなされ、家庭内暴力は「事件」として扱われなくなっており、よほどの重症を負うか殺されるかしない限り、警察は取りあってくれない。毎年200-300人（主に女性）がDVが原因で亡くなっており、2020年の統計はまだ出てはいないが、外出自粛が始まった3月には、電話相談に寄せられたDVに関する相談件数は2月の24%増となった。また、モスクワ危機センターへの相談件数も15%増で、各地の人権団体や相談窓口の受信件数は軒並み上昇している。また失業や休業による収入減で子どもを抱えて住居を失った女性は40%増（5月時点の統計）と、とりわけ経済的に不安定な地位に置かれている女性たちの生活状況の悪化が目立っている。

予期せぬ事態に陥いると社会が潜在的にもつ性質が表面化する。生活苦やDV被害の増加に関する報道と並んで、医療機関に食事を配達する飲食店や、自宅待機でオンライン環境のない子どもたちに電話で本の読み聞かせをする図書館員の話など、心が和むエピソードもあった。観客を失った劇場は無料でオンライン上演を配信し、遠い日本にいながらもその恩恵に与ることができた。もともと広大なロシアではオンラインでのやりとりや学習、学会へのスカイプ

による参加などは以前から普通に行われていた。そのため、コロナ禍の際も比較的スムーズにオンライン化へ移行している。文学作品や学術論文の電子化も根づいており、研究上の不自由は感じなかった（むしろ日本の文献を用いる予定だった論文は図書館の閉鎖により着手できなかった）。

ロシア人の災難への適応力には到底敵わない。オンライン授業への対応にあたふたしている私の元には、これ幸いとでもいうように執筆に励むロシアの作家や批評家たちから、「こういうの書いたから読んで感想聞かせて、暇なんでしょう」と添付ファイルが次々に届き、自粛期間を創造的な時間になっている彼らを羨ましく感じた。とはいえ、日本もロシアも、まだまだ感染拡大の中であり、互いの無事を祈りながら終わりの見えぬウイルスとの闘いは二度目の冬を迎えている。